8月30日説教抜粋「スミソニアン博物館の展示品」

仙台の教会でかつて、教会学校の先生がお話しくださった中で印象的なのは、アメリカのスミソニアン博物館の原子爆弾（Little boy）を運んだ爆撃機エノラゲイの前で、日本の国土に落とされた原子爆弾が炸裂する映像を見て、アメリカの人たちは拍手喝采をするという事実です。もし、私たちの誰かが、その場に居合わせたらどのような思いを持ったでしょうか。何十万人もの命を奪い、いまだに多くの人を苦しめている原子爆弾の脅威を考えると、戦争の早期終結のための決断という大義名分があったとしても、まるで大きな花火でもみているような反応の仕方に、おそらく怒りが止まらなかったろうと思います。これほどに国家間、民族間で感じ方が違うのか、と驚かせます。国家エゴ、民族エゴ、宗教エゴは終わることのない世界の争いごとの根本にあるのです。スミソニアン博物館で感じる怒りもまた、その国家エゴ、民族エゴなのでしょうか。それらが一つになって世界国家が作り上げるよりは、もっと緩やかな世界連邦を構成することが世界平和実現のもっとも近い方策なのであるというのは、ある思想家の提唱です。